

# 高皇産靈神社沿革

霊峰白山を源とする手取川の支流木呂川の清流に恵まれ、押野には周辺のどこよりも早く人々が居住した。そのころは、手取川扇状地では最も古い、今から四千年前の縄文式土器群が、大塚遺跡で発見されたことからうかがえる。大塚の地名は、明治初期まで古墳が残っていたことに由来し、古墳時代の押野は、豪族が居住した地でもあった。中世には、押野荘地頭富樫家喜の館が建ち、大野荘湊と白山本宮を結ぶ白山大道が通るなど、押野は、古くから人々の往来が盛んであった。

押野の旧社として中世の押野山王社が知られている。江戸中期には神明社・春日社・観音社の三社が存在し、後期に多聞天社・国常立社・比咩社と改められている。明治初期には高皇産靈社と清水社（後に清水神社に改称）の二社となり、現在の高皇産靈神社は、神社合祀令によつてこれらを合祀して明治四十四年に建立したものである。

旧高皇産靈神社 祭神 高皇産靈尊

押野山王社は当社と伝えられ、押野西部の「宮様跡」と呼ばれる地に鎮座した。江戸期の神明社・多聞天社にあり、押野南西部鎮座（現在の押野霊園辺り）の国常立社を合併したとみられる。

清水神社 祭神 天照大神

比咩社とも呼ばれ、前身は江戸中期の観音社とみられる。押野東部に鎮座し、門前の村民が「宮前」姓を名乗る由来になつた。

